第５回中野区基本構想審議会　部会（自治・共生・活力）

〇日時　　令和元年８月 16 日（金曜日）午後 7:00～9:00

〇会場　　中野区役所７階　　第 10 会議室

〇出欠者

１　部会委員

出席者

宮脇　淳（部会長）、横田　雅弘、笠尾　敦司、岡井　敏、岸　哲也

小池　浩子、米持　大介

欠席者

髙橋　宏治、高橋　佐智子

２　事務局

企画課長　　杉本　兼太郎

広聴・広報課長、業務改善課長　　高村　和哉

参事（情報システム課長事務取扱）　　平田　祐子

産業観光課長　　堀越　恵美子

観光・シティプロモーション担当課長　　桜井　安名

文化・国際交流課長　　藤永　益次

区民活動推進担当課長　　宇田川　直子

基本構想担当課長　　永見　英光

【議　事】

〇宮脇部会長

それでは、ただいまより中野区基本構想審議会の自治・共生・活力部会第５回を始めさせていただきます。本日は髙橋宏治委員と高橋佐智子委員からご都合により欠席とのご連絡をいただいておりますが、半数以上の部会員の方に出席をしていただいておりますので、会議は有効に成立をしております。本日の終了の目途は、９時としたいと思いますので、よろしくお願いいたします。それでは、本日は自治・共生・活力部会最後の会となりますので、部会の審議内容のまとめを行いたいと思います。まず本日の配付資料の内容につい

て、事務局より説明をお願いいたします。

○永見基本構想担当課長

それでは、説明をさせていただきます。次第の裏に資料の一覧が記載してございます。資料１が自治・共生・活力部会の審議内容、資料２が新しい基本構想を考える職員プロジェクトチーム提案書ということでお配りをしております。

まず資料１からご説明をさせていただきたいと思います。本日の部会が最後の予定でございますけれども、9 月 27 日（金曜日）の全体会以降、具体的な答申の内容を整理していくということになろうと思います。その答申を作成していくにあたりまして、今までの部会ではマトリクス形式の４分割した資料をご覧いただきながらご議論いただいておりましたが、資料１では、答申作成に向けて、文章の形で重点テーマごとにまとめさせていただきました。答申の案のベースになっていくもの、という意識でお読みいただければというふうに思っております。

重点テーマごとに、色々な項目を書いてお示ししておりますけれども、初めに現状の課題感等を書いて、そのあとに目指すべき状態を書いてある、という書き方になっております。また、アンダーラインが引いてある箇所が、例えば１ページ目の下の方にあると思います。こちらは部会の中で、あまり触れられなかった内容について、今日もしご意見をいただければということで、キーワードとして上げさせていただいたものですので、ご意見があればいただきたいというふうに思っております。

資料１の全体をご説明させていただきますと、１番目のテーマが区民と協働・協創する自治体ということでございます。最初の項目としては、区の職員は積極的に地域に出て、多様な主体と協働・協創し、地域の課題を解決する。また、ＩＣＴの活用などによって業務効率化を図る。二つ目としては区の政策形成過程において、区民の声が反映される。そういった仕組みが整っていることが大事である。三つ目として、複雑化する地域の課題に対応していくために、区が中心となって色々な団体を結びつけたり、そういった垣根を越えた協力によって地域の課題が解決されている。続いて区の組織が縦割りだという課題を解消していく。以上のようなご議論があったかと思います。

アンダーラインが引いてあるキーワードについてですが、「自治体間連携」は、資料としてお配りをさせていただいていたのですけれども、現在、里まち連携ということで、遠隔の自治体で経済交流、また観光交流等も行っているところでございます。中野区ではそれほど事例がないのですが、近隣の自治体と協力をして、区民の生活の価値を高めるような

取り組みをしている自治体というのも他ではございます。そういったものも今後必要と考えております。里まち連携についても充実していく必要があると考えておりまして、もしご意見があればと思っております。

次の「オープンデータ」について、こちらは二次利用の加工が可能な形で、データを公開し、区民や企業等がデータを利用することで、課題の解決や活動の活性化に結びついていくというものですけれども、区として進めていきたいと考えておりますので、何かご意見があればと思っております。

2番目のテーマといたしまして、違いを力に変える多様な連携というものがございました。近年、外国人が急増しており、外国人の皆さんが長く住み続けられるような多様性を許容する、そういった寛容さが必要ではないか。それから、中野には多様な個性また価値観をお持ちの方がいらっしゃいますので、そういったものが受け入れられるようなまち、配慮・尊重されるようなまちであると良いのではないか。また、違いが集まるということで、新たな力や行動が生まれ、そういったところで特色が生まれる。続いてハンディキャップのある方が、町に出ることを躊躇することがないようなユニバーサル社会の実現、といったご議論があったと思います。

3番目として、地域愛を育む人のつながりというテーマがございました。地域で活動する時間やきっかけ、情報がないという理由で活動していない方が多くいらっしゃるということで、様々なきっかけや情報を提供することで、誰もがいつでも気軽に地域活動を始めることができるのではないか。それから、これまでの地域団体以外にも、地域とつながる場があるといいのではないかということで、ゆるやかなつながりが地域において複層的・重層的に存在している。続いて、様々な方が地域にいらっしゃるので、そういった人材を活かす仕組みが必要なのではないかということで、人材や活動の情報がまとめられて、共有されているといいのではないか。さらに、地域団体の高齢化、また担い手不足というところが課題となっており、若者、また大学生などが地域に関わっていく、それで活気を生み出すと良いのではないか。続いて町会自治会の加入率が低下しており、また地域の中でまとめる力というものも低下をしているのではないか、という状況の中で、個々のプライバシー等は尊重されながらも、孤立せず、挨拶にあふれ、ご近所さんと豊かな関係が生まれるまちというというご議論がございました。なお、ご近所さんと豊かな関係という言葉は、事務局の方で作らせていただいたものです。

最後にアンダーラインを引いているキーワードとして「地域への愛着」がございます。

部会の中で、それに近い発言もあったかと思いますが、挙げさせていただきました。地域への愛着を持つというのは、様々なあり方があるのかなと思います。また、区民が地域への愛着を抱くことによって、まちにとってどんなよい効果があるのかというところをご意見があれば振り返っていただきたいと思っております。

4番目として、区内経済活動の活性化というテーマがございました。企業と企業、それから企業と地域等の持続的な連携によって、経済活性化、地域に貢献するサービスの提供ができ、区民の生活がより豊かになる。商店街は、コミュニティの核である一方で、売り上げが減少傾向であったり、空き店舗が増加しているというような課題があり、そういったニーズにマッチしたサービスの提供や空き店舗などの活用など、地域の特色を生かしながら、コミュニティやにぎわいの場としての多彩な社会的役割を果たしている。事業者が本社を中野におきたいと思えるような魅力を持って、中野区が事業拠点として選択されている。また、就業形態が多様化していて、多様な働き方をしている方が増えてるので、そういったものを受け入れる。さらに子育て世帯が住むことで、区内経済が活性化するのではないかというご議論がございました。

アンダーラインが引いてある「来街者・観光客」というところでございますけれども、このあたりの発言が少なかったかなという印象も持っております。中野ならではの魅力というのもいろいろあると思いますので、まちを訪れる、観光される方、そういった方がいらっしゃると経済も活性化するという側面もあろうかと思います。そういったところも必要なのかなと思っておりまして、ご意見がありましたらと思っております。

それから「女性や高齢者の就労」ということで、女性のライフスタイルに合ったような働き方、また高齢者が長く働き続けられるような環境、そういったものも経済活動の一環かなと思っておりまして、必要な視点かなと思っておりますので、何かあればいただければと思います。

最後に5番目として、身近にある文化・芸術というテーマがございました。文化・芸術には、まちの魅力や活力を向上させる力があり、文化活動が活発に行われて内外に発信されるとともに、団体同士がつながって新しいものが生まれている。文化・芸術が新たな価値観の形成であったり、若者などを巻き込む力もある。それから文化活動としてはプロの活動から市民活動まで様々な活動が行われていて、身近に多様な文化・芸術活動に触れているというのがよい。それから幅広い人が文化・芸術に親しめるようすそ野を広げるために、例えば、まち全体を舞台とした文化・芸術活動、また気軽に表現できる環境、そうい

ったものがあると良い。歴史・伝統文化の保護、継承というところも必要というご議論がございました。資料1についての説明は以上でございます。

少し長くなっておりますが、続いて資料2の方の説明もさせていただければと思います。新しい基本構想を考える職員プロジェクトチームを、4月に設置をいたしました。各部からの推薦職員と公募職員合計26名からなる若手職員を中心としたプロジェクトチームを作り、4月から8月にかけて、4つの部会の単位でチームに分かれて、様々な面から検討を行い、それぞれ提案書を作成し、各部会に対して提案書を提出させていただくというものでございます。部会の審議にある程度沿ってる部分もありますし、新しい視点もあるかと思いますので、反映をできればと思っておりまして、そのような目線でご意見等いただければと思います。

紹介させていただきますと、地域のつながりの希薄化というものが、先般行ったワークショップでも、課題感として区民の中で共有されている、という状況がございます。中野区は、若い世代が多い、単身世帯が多い傾向があるということでございまして、そういった若者又は単身者の人達が地域につながりたいという意識をどれだけ持てるかということが重要ではないか、という仮説を立てております。意識調査では先ほどもありました通り、地域に関わらない理由の大半が「時間がない」というような状況の中で、関わる時間にある程度幅を持たせて、関われる時間に関われる範囲で、地域に関わっていこうという「ゆるやかなつながり」というものが大事なのではないかということでございます。そのためには、打ち解けるための場所が必要であるということであるとか、打ち解けるためのきっかけとして、人を動かす力のあるインフルエンサーといわれる人材が必要なのではないかということでございます。

強み弱みということで分析しておりまして、例えばコンビニが多くて、500メートル圏内に必ずある。公園が全体の面積は少ないけれども、数は少なくない、つまり小さな公園が近くにある。こういったことは、ある意味では強みなのではないかという分析もございます。そういったところで、インフルエンサーが多く住んでいるというような強みもあるのではということでございました。その一方、弱みということで、つながりが希薄な面であったり、交流時間がない、興味を持ちづらい、という状況があるという、先ほど申し上げたような状況がございます。

裏面をご覧いただきますと、10年後に目指す姿といたしまして、生活の中に溶け込んだ地域の拠点において、多世代にわたるゆるやかなつながりが生まれている、というのが一

つの提案でございます。地域の拠点ということで、例えば、コンビニや公園等の拠点の活用であったり、子ども食堂・高齢者食堂などを参考にする、と。それから、アウトリーチの形としても訪問型だけではなくて、地域拠点型のアウトリーチとかそういった視点で書いたものでございます。2 点目といたしまして、様々な分野のインフルエンサーを経由して各地域内においてゆるやかなつながりが生まれている、という提案でございます。そのためにインフルエンサーを把握し、そういった人たちがスペースを活用して、つながりを生むきっかけを生み出している、という視点で書いたものでございます。こちらについても、ご意見をいただければと思っております。資料の説明は以上でございます。

〇宮脇部会長

ありがとうございました。それでは、部会の審議内容のまとめについてご検討いただきたいと思います。永見課長から、ご説明がありましたけれども、私の方から 2 点補足をさせていただきたいと思います。今日、ご審議いただきますこの部会のまとめですけれども、これについては前回の全体会において、私の方からご報告を申し上げました。5 つのテーマについて、皆さんのご発言をまとめたマトリックス型の表形式の資料があったことが、ご記憶にあると思いますが、これをベースにして重複している点等を整理をしていただいて、今説明していただいたような資料にまとめ上げたと、いうものでございます。

2 点目ですが、この資料のまとめというものなんですけれども、これも永見課長から説明がございましたように、9 月と 10 月に開催される審議会の全体会を通して、区長に提出する答申を作成しますが、その検討するための資料というものとして、全体会に提出をするという形になります。中野区の場合には、基本構想そのものを作成するというのではなくて、審議会として、中野区さんの基本構想に盛り込むべきであると考えられるものについて、区長に提案をするという形をとっております。したがいまして、皆様の今までのご意見というのをできるだけこのまとめの中に繰り入れているわけですけれども、ご覧いただきまして、ここのところは物足りないなとか、この表現は自分たちの考え方とは違うんじゃないかなとか、あるいは根本的に、この項目は入れておかないといけないのではないかといった点について、ご指摘をいただきたいのと、それからアンダーラインのところでございますね。お気づきの点がありましたら、この部分についても補っていただきたい、と思います。

オープンデータというところからの地域愛という哲学的なところまで、いろいろとグレードがありますから、なかなか難しい面もあると思いますけれども、ぜひお気づきになっ

た点で結構ですので、ご発言をいただきたいと思っています。最後に皆様からのご了解を得たいと思っていますが、今日ご発言をいただいたことにつきまして事務局と整理をいたしまして、副部会長と私の方で資料作成については行って、全体の審議会の方に提出をしたいと思っております。皆様には9月の中旬ぐらいにその提出する資料については事前にお配りをするという形をとりたいと思っております。

このまとめ案につきましても、どこからでも結構です。お気づきの点につきましてご自由にご発言をいただければと思います。全体会の時に、私の報告に対して二つ主な意見がございまして、一つは地域経済の活性化について、要するに区内の地域の中で経済循環するような考え方を持っているのかというご質問がありまして、これに対しては、当然地域内での循環をより厚くしていくということは必要であり、経済活動とコミュニティといったようなものが密接に関連し合いながら、厚くしていくことを部会でも議論しましたという報告をさせていただいております。それからもう一つは身近にある文化・芸術について、新しい価値の創出、ということに関して、展覧会を開くなど盛んに行っていて、区として新しい芸術活動を生み出せるような活発な地域で中野区があるとよい、というご意見もいただきました。

それでは皆様の方からどこからでも結構です。お気づきの点につきまして、ご自由にご発言をいただければと思いますのでよろしくお願いいたします。

○小池委員

女性や高齢者の就労のところで、女性の就労ということになると子育て世代、安心して子どもを預けて働ける環境というのも福祉と直結している部分だと思います。いろいろご家庭にいらっしゃりたい方もいれば、働きたい方もいると思うのですが、働きたい方を支えてくれる社会的なシステムがあるということが大事ではないかなと思いました。また、仕事ばかりになってしまい完全にワーク・ライフ・バランスを欠いて、ワークワークになっているような方もきっと多いと思うので、精神的なサポートなのかもしれないですが、何かサポートがあると良いなと思いました。

高齢者の就労というものに関しては、今60歳ってとても若いですよね。なので、そのあとの高齢者の就労というのもセカンドキャリアみたいな形で、それまでの経験を生かした働き方、というものがあると良いのではないかなというふうに思いました。

○宮脇部会長

ありがとうございます。女性にしても高齢者にしても今ご指摘がありましたように、多

様な生き方というのがあるので、その選択ができてそれを支えられるように環境整備をしていくことが必要ですよね、というご意見です。その他お願いします。

○米持委員

4番の地域経済の活性化のところ、ちょうど今ここに目を通していただいているのですけれども、まず一つ目のところに書いてある企業と企業、と書いてあるのですが、ちょっと各論になってしまうので、これはどう反映されるかっていうのはわからなかったところなんですが、例えば今、ICTCOとかいろいろなところがあるのが1ヶ所になると良いのではないかということで、結びつくイメージがわからなかったのですけれど。単純に連携している、ということですか。

○永見基本構想担当課長

そうですね。つながりを持たれている企業や団体がある一方で、つながっていないところもあるというお話があったかと思います。よりそういったものを高めていく必要があるのではないか、という意見だったと思います。

○米持委員

やはり何かしら一つの窓口にするとか、わかりやすくする。さっきの縦割りがどうのと書いてあったところがあったと思うのですが、1番の、どこに相談して良いのかわからないというのが、経済界の方で問題としてあるので、そういうものが少し盛り込んであるとよろしいかなと思いますので、発言させていただきます。

あともう1点、三つ目の丸のところですが、「先端技術の新たな産業や」ということがあるのですが、できるだけ既存のところも減らないで新たな人が来るということが、活性化に結びつくのかなと思いますので今、以上2点発言させていただきました。

○宮脇部会長

ありがとうございます。まず第1点目のところですけれども確かにご指摘の通りですし、以前にもご発言いただいていたと思います。このことについては、やはりハブ的な機能を、どこか1ヶ所でハブ的に集積させてるような情報も含めて、窓口を充実させていくというようなイメージ、こういったもののご指摘かと思います。

それから2番目の点につきましては、新たな産業だけではなく、既存産業も生かしていく、そういうイメージになるような表現というものを考えていきたいと思います。

○岡井委員

オープンデータというところについてなのですが、まず前提として、区として協働・協

創ということを推進をしていく、というのはよろしいでしょうか。

そこをやっているというのは、言葉を変えると自治体 3.0 が進んでいる自治体ということになります。そういう事が進んでいるところは、総じてオープンデータをかなり推進している自治体ばかりで、5 月 10 日の第 2 回部会配付資料のうち、「中野区の現状に関する参考資料」というものの 7 ページに、「オープンデータ取組自治体数の推移」という表題の資料がありました。それによりますと、取組自治体割合は、2019 年 3 月時点で 26%であり、それだけの自治体がすでにオープンデータの公開に取組んでいますということです。中野区は、この協働・協創というところを、より柱において推進をしていく立場の区ですので、そういうところは逆に言うと、他の自治体よりもよりオープンデータの取り組みが進んでいないと駄目だと思いますので、ここについては、活用ということだけではなく、オープンデータの活用がものすごく進んでいるっていうようなイメージ等、フレーズというのをぜひ入れていただけないかなというのが、希望です。

オープンデータは、あると良いということもあるんですけれども、逆にないとどうなるかということもありまして、公開されていないとエビデンスベースではない、いろいろな意見や陳情に近いものが、どんどんどんどん寄せられてきて、そこから建設的な取組みに発展するという割合が低いままになる可能性が高いです。これがエビデンスベースになってくると、より建設的で意味のある実効性の高い取組みに変わっていくというような効果の面もありますし、効率性を考えても、このデータがないと、行政と一緒にやりたいなと思う立場の区民、あるいは企業やＮＰＯの人たちは何をするかというと、区の窓口に一斉にメールを送りつけたり電話をかけまくるということになるので、たぶん現状そうだと思うのですが、その対応だけで 1 日が終わったなとか、何も業務しなかったなっていう日が多いのじゃないかとご推察させていただきますが、そういうことが起こっているので、効果効率両面で、ここについては協働・協創をやるということであれば、オープンデータの取組みがとても進んだ区であって欲しいと切に願います。

○笠尾委員

今のお話に関連しているんですが、割とその辺のところが、あまり議論されてなかったように思うんですね。そもそもオープンデータが利用できるためには、ネットワークが、概ねほとんどの人が使えているという状態でないと意味がない。ということは、そういうことが、10 年後などという先ではなく、今、起こってなきければいけない、と。

先日、地方自治等 IT に関してコンサルテーションをしている人と会って、とにかく今、

日本の行政の取組みというのが、諸外国と比べても、デジタル化が非常に遅れている。他のところはほとんどがもう軸足は、デジタルにあると。スマートフォンとかですね。今、日本でも60代の人でもスマートフォンはもう50%、60%を超えるぐらいに普及しているので、軸足をそちらに移し、できればすべての人がネットの情報に、水道とか電気と同じように使えるような状態にしておくということが、一番効率的で弱者を救済することになる、という話を強くされまして、確かにそうだなと。そういう前提、情報インフラというのが非常に重要なものだ、ということが抜けた状態でこの議論が進んでいたような気もするので、できれば、今、このオープンデータから始まって、3.0の話もあるんですが、特に中野の特性を考えると、とても重要なのではないかと思いますので、そこを強く言わせていただきたいと思います。

○宮脇部会長

ありがとうございます。オープンデータについて指摘をするにあたっては、データのネットワークといったようなものを社会インフラとしてとらえていくという、そういう姿勢というのを示すべきではないかというご意見をいただきました。オープンデータをやるのであれば、行政の内部の構造変えないといけないんですね。要するに行政内の情報共有が進んでいないと、オープンデータっていうのはかなり難しいわけで、この問題というのは、行政組織を変えていく、つまり行政組織変えるということは、今の権限とか責任といったような構造も変えていかないといけないということで、かなり大きな起爆剤になるわけで、両方から見ていく必要はあるのかな、というふうに思いました。ありがとうございます。その他ご意見をいただければと思います。

○岸委員

先ほどお話にあった高齢者の就労の点なのですが、ちょっと失礼な言い方になってしまうかもしれませんけれども、高齢者の方の社会的な居場所という意味での就労の形、就労と言って良いのかわかりませんが、社会参画に近いような就労の形、というのをかなりオープンにフラットに広げていった方が良いのではないのかなと思っています。

前回の全体会でも発言があったかと思うのですけれども、地域活動区内の経済活動の活性化の中の、おそらく区民生活を豊かにする産業などというようなあたりだと思うんですが、何かソーシャルなビジネスを考えている方がいらしたような気がして。それというのは何かいろいろなことに結びつく可能性になりそうだなと思います。それは私が取り組んでいる自治会長会などの継続性なんかもそうですし、何か地域の人間関係の調整のコスト

みたいなものを善意に頼るのか、あるいは何かもうちょっと違ったシステムみたいなものも入れていくのかというところは、今後の区民の社会について、取り組みの一つになりうるんじゃないのかなと考えていましたから。何かそういう新しい産業というふうになるかわかりませんけれども、経済もボランタリーの気持ちをまじったような動きができていくと、それはやっぱり住民活動の 3.0 とかそちらの方にも、親和性があるかなというふうに考えています。

○小池委員

関連してなんですけれども、まさに今の話題ってシェアリングエコノミーみたいな話なのかなと思ってまして。労働力のシェア、助け合いみたいなところで、紹介っていうと入りにくいかもしれないけれど、そういう何かをシェアするシステムとなると、今の若い人にとっつきやすいのかもしれないですよね。そういう入口の違いなのかもしれないですけれども、既存のシステムというのと、今のこういうニーズというものがうまく重なっていって、それが助け合ったり何かをシェアしていくという、それって持続可能性みたいな話にもつながっていくと思うんですけれども、そこが、過去の文脈から現在のところまでやり方として一つつながるような書き方ができると良いのかもしれないなと思いました。

○宮脇部会長

ありがとうございます。事務局に確認したいんですけれども、健康・医療・福祉部会で支援を必要な人を支える社会参画という重点テーマがあって、高齢者の方に関する検討をされていると思うのですが、今のようなご議論もある程度あったのでしょうか。

○永見基本構想担当課長

そうですね。健康・医療・福祉部会の中でも 1 つのキーワードとして、高齢者の就労がありました。シェアリングというような話までは踏み込んでおりませんが、やはり就労は、一つの社会参画、あるいは自己実現の方法ということで、ご発言がございました。

○宮脇部会長

別に縦割りで仕切る必要はないので、全体の会議のところでそれは調整すればいいわけですよね。同じ高齢者についての見方というのか、視点という面では今いただいたようなことも整理をしたいと思います。ありがとうございます、その他お願いします。

○横田委員

今のご発言に関連してですけれども、この中では、女性と高齢者は、就労という形でしか登場してないんですが、今のような社会参画的なものや、別に就労しなくても活躍して

もらいたいところがありますので、全体の他の部会で議論されているのかもしれないのですけれども、例えば多様性のところについても、女性が非常に少ないということによる多様性の欠如というものもあるし、若い人から高齢者までの意見がそれぞれ、この中では人のつながりのところで若い人と高齢者のつながりの事が少し述べられてますけども、女性と高齢者の活躍という意味では就労以外にも文言が付け加えられると良いなと思いました。

○宮脇部会長

ありがとうございます。特に、そういう形で一応整理をするか検討させてください。事務局では、区内経済活動というところで位置付けているので、そういう就労という形になっていますが、確かに自治とか共生ということになると就労だけの話ではないわけですから、位置付けも含めて検討させてください。

○横田委員

質問ですが、ここから出てきた文言を直接書くわけではないということでしたけれども、基本的には基本構想を作るとき、この中の文言が使われるというふうに考えてよろしいでしょうか。基本構想そのものを作るわけではないという先ほど説明があって、そこの土台となるような資料や、検討の内容を紹介するというような役割どころかと思いましたけれども。しかしながらここに出てきた文言が使われるというふうに、基本的には考えたほうがよろしいでしょうか。

例えば具体的に申し上げますと、多様性のところに、ダイバーシティという言葉がないんですが、ユニバーサルな社会というような言葉はあったのですけれども。「違いを力に変える」これは渋谷区のダイバーシティのかなり近い文言でありますが、ダイバーシティというものの考え方がユニバーサルデザインを超えて、共有できる部分をふやすというだけではなく、違いがあってもそれを受け入れてくという、排斥しないという思想なので、この思想を代表するようなこのダイバーシティという言葉がどこかにあったほうが良いなと思ったのですけれども。そういう言葉は文言については、全く別に区の方で考えられるのだということであれば良いのですが、やはり基本的にここに出てる文言が使われるとすると、どこかでその言葉を使いたいなと。1 例としてそのように思いました。

○永見基本構想担当課長

こちらについては、宮脇部会長の方からもお話がありました通り、こういった内容を盛り込むべきではないか、という形でご提案いただくということで、具体的にそれを基本構想でどう表現するかというのが、必ずしもこの表現がそのまま使われるとは限らないと思

っております。ダイバーシティという言葉は、今多くの場面で使われている言葉でもありますし、そういった表現を使っていくという考えは当然あろうかと思います。会長とも相談のうえ、より伝わりやすい表現があるのか、それともやはりダイバーシティという表現を使ったほうが良いのか、十分に検討した上で作っていきたいと思っております。

○宮脇部会長

今のご質問ですけれども、課長の方からご説明がありましたように、私どもの答申というのは区側についての基本構想作成に対しまして拘束力はありません。従って参考の意見を申し述べるという、ただ答申の時に、こことここは強調したい。それはそれで別に拘束力はないのですけれども、あとでそこは何らかの検証ができるという、その程度です。

○笠尾委員

今のお話に関連しているんですけれども、オープンデータの話に限らず、シェアリングエコノミーもデジタル技術があって初めて成り立っているものなので、この中の多くの人に情報が行き渡るとか、ほとんどのことはデジタルベースにデジタルネットワークがあることで大きく改善されることではないかなあと思われるんですね。

この中の文言で言うと、情報通信技術ＩＣＴを活用する、などぐらいで終わっているので、ここはもう少ししっかりとデジタルインフラとして、デジタルのネットワークを十分に活用していくんだ、というようなことを言っていただいたほうが良いのではないかと思いました。さっきのオープンデータだけではなくて、いろいろなところにそれが関わってきていると思いますのでぜひそれが実現されると良いなと。もしも中野に住んでいる人は貧困家庭であっても情報には事欠かないみたいな形になったら、それは非常にすばらしいことになるのではないかと思いますし、中野らしいような気もしますので、できればそのぐらいの積極性をもって、取り組んでいただけると嬉しいなと思いました。

○横田委員

今の点はとても重要だと思いました。経済的な格差によって情報の差異が生まれないようなシステム、これがどんなものなのかちょっとわかりませんけれども、しかし10年後を構想していくのであれば、やっぱり情報格差が逆にデジタル化して生まれてしまうということは良くないので、そこが生まれないシステムが開発されている、というようなことがクリアに出てきてた方が良いのかなというふうにも思いました。

○岡井委員

笠尾委員がおっしゃったご意見に本当に同感で。さっきのオープンデータ含めて、そう

いったものを推進する時には、それが先進区であるということはデジタルデータ、デジタル活用についても先進区じゃないといけないので、そこはやっぱり基盤としてやっぱり盛り込んでいる必要があるのかなというふうに思います。今日の会議システムも、パソコンのところでデジタルデータに変換されて議事録がされていくので、多分何人月かわからないのですけど、大分工数も浮きますし、デジタル化されたものだと今度は文字を音声に変えて、いろんなツールは世の中にもうあるので、目が見えない方も、音で聞ける。逆もあります。そういった活用もしやすいので、ここのデジタル技術についても、進んだ区であって欲しいなっていうふうには思います。

〇宮脇部会長

ありがとうございます。デジタルネットワークの活用、それから今ご指摘のありました情報格差の問題ですね。こういった問題については少し具体的に書き込むようにしないと、全体のまとめというものの説得力といいますか、信頼性っていったようなものがなかなか出てきませんので、これについては検討をさせていただきたいと思います。それと、デジタルネットワーク情報のオープンデータ化が進んでいくと、要するに自治体間競争が激しくなるんですね。それに対応している自治体と、そうでない自治体というところの選別化が非常に始まっていきますので、競争が激しくなるということはより個性を別に出していかないと。データ化がされていくと、データそのものについては、実は価値観というのがだんだん下がっていくんです。データが全部共有されていくと。そこで格差が出てくるのはむしろ、地域の個性的なもので担っていくということになりますから、その部分のところは自治体間連携、連携と競争とは裏腹の問題ではありますけれども、当然ちょっと目配りはしておかないといけないのかなと。それと、くどいようですが、オープンデータとか、デジタルネットワークをきちっと機能させるためには行政組織内の構造を変えていかなければいけないので、こことこころは行政改革のほうで一定の整理をしていかないと、全体を読んだときに、矛盾感が出てくるということになります。

〇横田委員

今のご発言に関連して、個性という問題なのですけれども、これを見ても、結構総花的なものになっていくというものがあります。多分他でもそうではないかなと思って。これをみんな集めてまたやろうというとさらに総花的なものになっていく。それだと読んでもつまらないなという感じもあるし、本当にやるのかなと。どこから手を付けるのだろう、ということがあると思いますので、何が重要で、何が重要でないと考えるということもで

きるのですけれども、これからこういうふうに土台を進めながらこれをやっていくとか、あるいは特別に中野の個性として、この点とこの点は特に重視するのだというようなものを、どうこの部会から出てきた情報を吸い上げて、誰が決定していくのかということはとても大切なので、これはここの役割ではないかもしれないのですけども全体会の方でもご発言いただけたら良いなと思いました。

〇宮脇部会長

逆に皆さんから教えていただきたいんですが、この部会の中でトリガーとして一つだけ上げろと言われたら何を上げますか。今、全体的に確かに抽象的で総花的になっていて、全部重要だけれども、どこからと言われるとなかなかよくわからないですよねという。確かにそうで、少なくとも全体会で言ったときにはこれが並列的に並んでいるだけでは、おそらく読んでも面白くないし、何がどうなのという話になってしまって。できれば難しいことなのですけれど、トリガー的なものですよね。全部必要だけれども、どこら入っていくの、みたいなそういうものっていうのは、やはり区が展開されるためには必要なんじゃないかなと。ただ言うは易くなんですが。重要な意見の中でこの辺じゃないのというのは、一つは、今長期的なテーマとしてはやはりデジタルネットワークですとか、こういったものが絶対不可欠だよねという、そういう話が一つ材料としてあったのですが。その他、これは別に今日結論出すとかそういう話じゃなくて、あえて一つ絞るとこの辺なんじゃないのかというのは。

〇岡井委員

どんな区を目指すのか、どうやって目指すのかということを What と How という形で置き換えていくと、What で差別化していくというのは結構難しいんだろうなと。どの行政も子育てであったり、いろいろなものを上げていきますよね。この特に部会の方で出ている意見というのは、その How のところを、協働・協創あるいは違う言葉だとシェアリングだったり、自治体 3.0 的な言葉がいっぱい出ていますけれど、これを研ぎ澄ましていこうという話なので、結局行政として何かできるかより、それならやるよというふうに思われるというのは、参画しやすい区、関わりやすいという、こういうような受け皿であったりとか情報がいっぱいあったりとか、許可がおりやすいとか、フランクだとか、返事が早いとかですね。こういったものが小さな積み重ねなんだけれども、そこを束ねる言葉としては参画がとてもしやすいということは、差別化のポイントになるんじゃないかなというふうには、いろいろ議論してて感じています。

○横田委員

私はこの資料2の方でもつながりの話が出てるんですけど、つながりやすいっていう、つながるっていうのは、誰がつながるのかっていうところは、私の先ほどダイバーシティのことを申し上げましたけれども、これまで見過ごされてきたり、なかなか参画できなかった人たち、高齢者であり、女性でありあるいは障害者であり、あるいは性的なマイノリティーであり、外国人であり、そういう多様な方々が、つながりやすいっていう区になって欲しいなということを思っていますので、つながりやすいためのベースとしては、先ほどからお話が出ているようなデジタルを用いたつながりっていうことが、一つ具体的にできることかなというふうにも思います。

○小池委員

私も皆さんのこのプロジェクトチームの資料の、やはりつながりのところがすごく良いワードだなと思って、気になったところなんですけれども、コミュニティを形成するっていうことが、一つ大事な目標なんだけれども、コミュニティに入ることを求めるというよりも多様なコミュニティが存在していて、自分の入りたいところを選んでいくことができるっていう選択肢があることが大事なのかな、というふうに思いました。地域への愛着のところが、今ない部分ではあるんですけれども、皆さんここに来てる人達って、地域愛が強すぎて、なかなか一言で言えないんじゃないかと思うんですけれども、ここに住みたい住み続けたいっていうふうに思えることがとても大事で、結構周りとかを見ていると住む場所を選ぶときに、結婚しました、じゃあどこに住もうという時になって、待機児童が少ない自治体はどこだろうっていう選び方をしたりとか、さらに通勤し易いのがどこだろうとか、そういうメリットデメリットで選んでしまいがちなんですよね周りを見ていると。そうなった時に、中野区のそういったことに勝てる魅力って何だろうなっていうところで、自分が入っていきやすいコミュニティっていうのが、一つ魅力になるといいのかなというふうに思いました。

○宮脇部会長

ありがとうございますいくつかのですねキーワードをいただいております。「参画」それから「つながり」それから「コミュニティに入りやすい」。やっぱり何かこういうキーワードが必要なんだと思うんですね。そこからやっぱり我々の考えたことをある程度具現化して具体化していくっていう、そういうものでやっぱり今のお話でもあるんですが、根幹は

情報格差があるんで、選べてないわけですよね。いろんな人たちが限られた中でしか選べないという状況になってきていて、それを今いただいた先ほどの情報化の問題もそうですけれども、克服していくためには、先ほどのデジタルの話も含めて、情報の不完全性みたいなものをやはり改善していく努力っていうのが根底のインフラとして必要なのかなっていう、これは私の復習みたいな話になりますけれども、今いただいたところでは、あります。実はですね、地域への愛着っていうところを始まる前、どうやって議論しようかなってすごく思ってたんですが、今いただいたようなことをベースにしながら考えていくっていうことはこれは可能なんだなっていうふうにはちょっと思いました。それで、実はですね、ある程度議論していただいてる部分があるんですが、今の議論をする際に進めていただきたいんですけれども、もうこれもかなり議論してるような気がするんだけど地域社会の姿についてっていう実はもう一度全体を見て、それで中野区、10 年後ですとか、さらに長期を睨んで見た自治共生活力全般に関する地域社会の姿っていうのをもう一度、皆さんの方からご自由に意見をいただいて、今までいただいた意見との体系化をしていきたいなって、事務局の方から希望があったんですけれども大分ここもご指摘をいただいてると思うんですが、そういう少し大きな観点も結構ですので、どんどんもう少しいただけると。

○岡井委員

大きいかどうかわからないんですけども、先ほどの資料 2 の地域とのつながりというところで、職員プロジェクトチームの方で上がってるように 20 代 30 代の人口比率がとても高い。だけど、アンケート調査、2018 年中野区区民意識実態調査っていうのが分厚い冊子であったと思うんですけど、あれを見てると、まず回答をしてくれてる人自体が、年齢層を見ると、過半数が 50 代。4 分の 3 が、4 ページぐらいにあったと思うんですけど、4 分の 3 が 40 代以上っていうことなので、ほとんどの人が何かこう意見の前に感想っていう事さえもまだちゃんと出せてなかった、あるいは同じ冊子のちょっとページ数が忘れちゃったんですけども、地域活動への参画の年齢層別に表になっているところで、20 代、特に 20 代の参加率が町会自治会だとかね、ていうようなところがあって、ここが資料 2 のプロジェクトチームのところでも、地域とつながりたいという意識にいかに訴えられるかが重要であるっていう、もっともなんですが、地域とつながりたいっていうふうに思って、何か参画する動機っていうのは少ないんじゃないのかなと。そうなると、自分自身 20 代 30 代ではないんですけども、こうやって今この場にいたりとかいろんな活動に最近参画をしているっていうところの動機を考えていくと、特別な体験がしたいっていうところが根底に

あって、それができる。能動的にやっぱり参加できると面白いっていうものがあって初めて成り立っていくのが、そうすると中野区っていうのは、インフルエンサーっていうこともありまして、いろんな面白い人や面白いこと・場っていうのは、そもそもあるので。それをうまく活用していくとか、あるいはお祭りなんかも結構夏多かったですけども、これも、現状でいくと、地域のある団体が中心になってやっていくというものが、そういったものを企画提案できるとか、より能動的に参画できるっていうような場とかそういったものがチャンスとして、ていうのが、そういうのがあると、結構その中の今参加できてない人が参加する側に変わったりとか、それが続いていくとそれ面白いねっていうことで、他の行政・自治体に住んでいる人も入ってくるっていうような動きもあるのかなと常々感じております。

〇笠尾委員

つながりていうことで、つながりがすごくキーワードとしていいなと私も思って。先ほどのお話ですね、横のつながりだとか、そこの視点で考えていくと、コミュニティに入るっていうのもさっきのシェアリングと合わせると、コミュニティをシェアリングしてるみたいなそういうような、ちょっと薄くなるかもしれないけどいろんなところとそういうつながりを持っていくというようなこともこれからの形かな、みたいな感じのことも感じるんですね。あともう一つは横だけじゃなくて、例えば時代で縦のつながりがある。自分の話でいうと、生涯学習大学で思い出を皆さんで絵に描いてそれを共有していきましょう、という思い出を縦のつながりでつなげていくというようなことをしているのですけれども、そういう自分の思い出がしっかりとそこの場所にあるというのは、縦のつながりをつくっていく上で非常に重要だと思うのです。ですから、いろいろなものをむやみに壊さないで、それがどういう価値があるかみたいなことを元に考えて、残すか残さないかとかですね。経済効果だとかオリンピックが近いとかというようなことではなく、もっとものの価値みたいな、それが残すことによってどういう価値が生まれるかというようなことを考えて、縦のつながりをつくっていくというようなことができると良いなと思っているので、横も縦もそういうつながりが、つくれるというような形になると良いなと思いました。

〇横田委員

私もつながりが気になると思っているのですけれども、つながりというのは一体どうやって生まれるのかなと。今のお話を聞きながら考えて、例えばここに文化芸術というものもあるのですが、その文化芸術というものを文化芸術はすばらしい、というよりもつなが

りの一つのツールとしての文化芸術とか、あるいは音楽とか。あるいは子どもと言った時も子どもをサポートするというよりも、その子どもと大学生とか若者や、あるいは高齢者をつなぐ、つまりつながりを作るために、子どもというものはどういうリソースなのかとか。つながりを作るために芸術アートはどういうリソースなのかというふうに、つながりというものを中心に考えていろいろなつながりを作る上での色々なリソースというものをちゃんと発掘し、そこにアクセスしやすくするというような仕組みというか、そういうものがないと。ただみんなでつながりましょうと言ってもなかなかつながらないので、そんなものを大切にでき、そういうものがたくさんあると文化アートなんかたくさんあると思いますし、サブカルチャーもそうですけども、そういったものもつながりをつくり出すための仕組みとして考えていくようなまちになったら面白いなというふうに思いました。

○笠尾委員

すごくいいお話だと思って。そのつながるためにいろんな文化や芸術があるとかって、それを具体的にこんなのもある、これでもつながる、あれでもつながるみたいなものがリスト化されているいと良いなと思いまして。自分の話になっちゃうのですが、昔、子どもはメディアという活動をやったことがあるんです。子どもというのは、昔は結構傍若無人にいろいろなところに勝手に入って行って、向こうの家はあんなだったよみたいなことを、情報共有のための手段だったりもするので、子どもはメディアという言い方は結構批判もされたんですけれども、そういう何がメディアになるか、それをフラットに考えてみると、結構いろいろなものがメディアとして使えて面白いのじゃないかな、というふうに思いますので、今のお話からすると、どんなものがメディアとして使えるかのリストアップみたいなのはちょっと面白いかなと思いました。

○宮脇部会長

さっき岡井さんが言われた点なのですけれども、今副部会長も言われたところと共有するんですが、要するにＷｈａｔをいくら並べても、なかなか実現のものにはなっていかなくて、Ｈｏｗというところをやはり我々としては永見さんの方も先ほど言われましたけども、この全体のとこに総論的なことを書かれるわけですよね。今まで議論してきたことは非常に重要なので、あとはこれの組み立て方の問題だと思うのですね。

今日いただいたことで言うと、やっぱりＷｈａｔを幾ら並べてもHowのところを総論の部分でうまく整理をして、確かに今更言って大変申し訳ないんですが、どうしても今まで文化っていうところがですね、座りが悪いという感じを受けていたのですけれども、今の

ようなお話をいただくと、非常に座りがよくなるんですよね。経済活動にも関連してくるし。そうするとそういうのを総論のところである程度我々の部会として、つながりというキーワードを使いながらそういうＨｏｗという言葉で、その言葉を使うかどうかあれですけれども、整理をしていって、各論ベースのところで落としていくというと一つすごくわかりやすいなという感じがしたのですけれどね。

○岡井委員

ちょっと繰り返しになっちゃうかもしれませんけど、言葉を変えるとＷｈａｔとＨｏｗっていうのは doing やることと being あり方みたいなところで、今の話って being どうあるかって言うところを強化しようということで、ここを主眼に置いている行政区ってあんまり基本構想、基本計画を見たことはないので、結構差別化できるのかなと思うのと、財政上で考えても doing だと多分いろいろなもの作らなければいけないので、仕事が増えるしお金もかかる。being の方はおそらくさっき文化芸術とか、あるものとかそういうようなことになってくるので、そんなにお金もかからないでできるので、これからの行政のあり方として後でも重要なのかなというふうに思います。

○宮脇部会長

ほかご意見をいただければと思います。

○岡井委員

今の話に続いてかもしれないのですけれど、ちょっと違う観点で、資料 1 で配られたものの中で、自治体間連携とかまだ触れてなかったので、お話しすると同じ関係なのかもしれません。ここで何か協創するという、区に隣接をしているところというのは、中野区の場合は渋谷・新宿・練馬、あと、豊島区杉並区というところ。それと区境というところで何かをするということもありますし、あるいは、いろいろ施策をやる時には、数はパワーなるので、連携して共同してやっていく、そういった意味で、もっともっと推進をして良いのではないかなというふうには思います。部会で配られた資料の中でも確かあったと思うのですけれども、中野区の現状に関する参考資料という、5 月 10 日に配られたものの中に他自治体の連携事例というのがいろいろあって、この中で幾つか調べてみたのですが、ここに載っているものの中で横浜市と川崎市が待機児童対策をやっているのですけど、とても成果が出てきていて、神奈川県で二つの市がすごく待機児童数が多かったのですけれども、この 1 年で激減していたり、保育士さんの希望者が殺到し始めたりとか、という事例も結構それが一つの市だとどこまでできたのかというふうに考えていくと今後税収とい

うのも豊富にいつまでもあるわけではないので、こういった連携というのは、どんどん推進すべきかなと。

連携を推進する中でも、いろいろな自治体の知見ということもお互いに入ってくるというところで、よりレベルというのも上がっていきやすくなるので、そういったことはどんどんやって、実行という意味ではまずやっていただきたいと思いますし、あるいは進んだ事例っていうところに焦点を合わせていくと、日本だけじゃなくて海外にもいっぱいあって、これはもう行政の方には釈迦に説法になるかもしれませんが、さっきのＩＴ系のところでも、エストニアであったりフィンランドであったり、日本以外のところの方がよほど進んでいるので、そういったものがちゃんとそこの情報収集に税金が使われて、どんどん情報が入ってきて、先進的な実行例を作っていける。そういった何ですかね、実行の連携もあるのですけれども、インプットの連携っていうところをいろいろ評価していってはどうかなというふうに、すいません長くなりました。

○横田委員

実は私、現在、地域のダイバーシティ推進についての研究調査をしている関係で、先日渋谷区長の長谷部区長にお会いしてお話を伺いしたのですけれども、そこは「違いを力に変えるまち」というのが最上位にあって、そこからすべていろいろところにおりているわけなんですね。お話を聞いているうちに、実は中野区長とも同い年で、新宿区長とも同い年で、同じ年齢だったらみんなで自治体連携したらどうなんだという話になって、それは可能だよって彼もおっしゃっていたので、ここについてはこの地区で隣接してますので、そういうところで可能なものについてはこのアイデア・あのアイデアということで、いろんな形の連携を進めたらいいんじゃないかなと。やっぱり数が力になるっていうこともありますので、一つの事例としては進められるのではないかなというふうに思って帰って参りました。

○小池委員

来街者・観光客のところがまだ特にご意見なかったかなと思いまして。よく中野駅の近くを通られる方は、おそらく肌感覚として非常に外国人観光客がふえていらっしゃることとか、土日にやはり中野の外からいらっしゃっている方が増えているっていうのは、おそらく感じられるのではないかと思うのですけれども。やはり観光客から見たらこのごちゃっとした感じといいますか、中野らしさが一つの大きな観光資源なのではないかなと思うので、これを大事にしていくこと。語弊があるかもしれないのですが、綺麗になり過ぎて

しまうと面白くなくなってしまうところがあると思うんですよね。なのでこのよさを残すって、結構住んでいる人にとってまちが綺麗になっていくことって、来る人にとって魅力がなくなることもあると思うので、その辺りバランスが難しいのですけれども、やっぱり観光客にとっても魅力があって住んでいる人にとっても過ごしやすい町というのが、両立できると良いのではないかなというふうに思いました。具体的に申し上げると結構小さな路地がたくさんあって、車が入っていけないような道があってっていうのってとても楽しいのですけれども、一方消防計画上、都市計画上問題がある部分というのも指摘されますよね。それをみんな消防車が入れるような大きい道路にしてしまったら、ごちゃっとした面白さがなかなかなくなっていってしまうものなので、そこに何かバランスがとれて来る人にとっての中野らしい魅力っていうのが残っていくと良いなというふうに個人的には感じる部分があります。

○横田委員

観光客や中野を訪れてくれる方という点でも、つながりというコンセプトを使えるのではないかなと思って。どういう意図でどういう楽しさを求めて中野に来るかっていう時に、京都みたいなものとはまた違って、まちの人とつながりを感じたり、まちの人が観光客に声をかけてくれるような、こういうまちがあったり、何か困ったときに気軽に聞けるとか、システム的にも多分わからなかったら誰に聞くみたいなものがネットで外国人も何ヶ国語でも検知されるとか、近くに行ったらこれはどういうお店でどんな店主がやっているかがわかるとか、そういうシステムを作っていくとつながりっていうテーマがこちらも使えるなというふうに思いました。

○笠尾委員

今の話も本当にそうだなと思っていて、いわゆる観光の地域じゃないけれども、生活が、皆さんが生活しているということを感じられる、ということ自体が、観光資源になるような気がしていてですね、それがうまく伝わると良いなと思うんですよね。またこれ別のこれはGoogleの人に会った時に聞いたのですが。都市観光とか、どこの観光でもどう伝えるかっていう時に、伝える媒体を作るお金の割合でいうと、作るのに3割で、伝えるのが6割で、解析するのが1割だっていうのですよ。普通自治体は、皆さん10を作るのに使っちゃって、伝えるのに使っていないので、Googleの人からするとそれでは全く意味がないと。だからいろんな魅力を伝えるための媒体を3のお金で作ってそれをその倍の6のお金でいかに伝えるかを考えて、それを解析して改善していくというようなことをしているところ

はみんなうまくいっているというんですよ。結構衝撃的な数字なので、これはびっくりしたんですけどですけれども。こういう意識を多分、私もそれまで持っていなかったので。やっぱりとにかく作らなきゃっていうところからいくと思うので。さっきのデジタルインフラと近い話かとは思うのですが、重要な視点かなと思いました。

○宮脇部会長

中野に外国人の方が増えているのは、何が目的で来ているんですか。

○高村広聴・広報課長

文化・国際交流担当が言うところでは、留学生が多いだろうという分析になっています。

○小池委員

うちの周りにシェアハウスが非常に多くて、夜歩いていても日本語以外の言葉がたくさん聞こえてくる。コンビニに行くと、これ多分日本語をしゃべるのは私だけだな、みたいなことがあるんですね、店員さんも含めて。なのですごくよい雰囲気で増えているなという気がするのと、観光客という意味では中野ブロードウェイ目当てでいらっしゃる方がすごく多いです。周りでも若い世代は日本のアニメを見て育ってますので。もう秋葉原とかに飽きて、こっちに来る人っていうのが結構たくさんいらっしゃる感じがしますね。

○宮脇部会長

そうするとですね、厳しいようなのですが、一つは、留学生は大学の立地ですよね。それとブロードウェイというものは、確かに魅力的で人が来てるように思うんですが、やっぱりプロジェクトですよね。一つのプロジェクトというか一つの箱の中に存在するということで、先ほどからの地域ということに対する広がりというところが、どういうふうにあるのかなっていうのが、正直言って、ない、のかもしれないという。

要するに札幌でもよさこいの時には人が来るわけです。人が来るんですけれども札幌ってどんなところと言うと何も覚えてない。なんかラーメンと雪が。ということは地域という意識ではないんですよね。何らかのイベントとかそういった形になって、つまり Fast ブランドっていうのでしょうかね、一過性のブランドで来ているっていう。そうなっちゃうとなかなか先ほどからの議論の中で言う、地域というものに根差したということにはならない。そこを、先ほど言われたようないろいろなことに落とし込んでいくという部分がこの中でもある程度見えて行けば。あと、この外国人とかですね。それがつながりというところに入っていくってことですよね。

○小池委員

最近拝見した資料で、外国人観光客の方の町に対する滞留時間っていうグラフがあったんですね。正確な数字を失念してしまったのですけれども、皆さん渋谷というとスクランブル交差点を真っ先に思い浮かべると思うのですけれども、実は渋谷って滞在時間が非常に短いんですね。あの交差点を何往復かして、ハチ公の写真を見て終わってしまうのだそうなんですね。一番滞在時間が長いのは新宿。やっぱり歩き回って歌舞伎町の雰囲気を楽しんであのあたりをグルーッと見て回って帰るという感覚で、まち自体も比較的大きいですから、意外なのですけれども新宿の方が滞在時間は長いのだそうです。そう考えると、回遊性があって歩き回る楽しみがあるというのを知ってもらえると滞在時間を長くする工夫にはなるのかもしれないですね。

○岸委員

先ほどからお話になっている外国人の方、つまり観光客っていうふうに考えるのかそれとも住んでる人っていうふうに考えるのかっていうところがあるというお話だと思いました。

私が今経験しているのは、新宿区に住んでいるオーストリア人なんですけども、最近とても仲良くなりまして、うちの町のイベントには必ず手伝いに来るんですよね。あとイベントによく来る常連でアメリカ人の家族がいて、お母さんがとても積極的で子どもを連れてくるのですけれども、彼らにとっては、日本人の暮らし自体がやっぱり面白いんでしょうね。例えば防災訓練で、炊き出しをやっていると、見たことがないものに対して、何を食べているんですか、何をしているんですかと聞いてきます。それが面白いと。日本人の普通の暮らしで、皆が何を話している、何を食べてる、みたいなものが面白いといいます。そういうやり取りをとおして、知り合いになって仲良くなっていっているところです。

また、プロジェクトチームの提案書を読んでいて、とても共感できる内容で良いなと思いました。ゆるやかなつながりというのを良いキーワードだなと思いながら、実はうちの町会も同じことをキーワードにしているので、やっぱり似たようなことをみんな考えるんだなと思って読んでいました。

うちの町会では、緩やかで重層的なつながりを作っていこうという考えで、皆さん出入り自由で、いきいきと幸福感のある町にできたら良いですね、というとこでやっているのですけれども、そういったところで、若い世代の人たちの関わりっていうのをたくさんつくることができています。

この文章読んでいてやっぱりちょっと誤解があるように思うのは、多分若い世代の人が

時間がないから地域とつながっていないという感覚を持っていると思うのですけれど、そんな時間かけてつながって欲しいとかというのもそれほど持っていないというか、そんなことばかりでもないし、ほんのちょっとしたことだけで全然十分なんだけれども、おそらくつながるには何か手順があるのではないかとか、挨拶が必要なのではないかみたいなところで、それが面倒になって、最初からそこら辺のハードルを越えられないというところが、あるような気がするんですね。

様々な世代や、考え方の人が重層的に自由に関わる地域社会というのは実際につくれますし、作っているんですけれども、問題はそこからで、非常に居心地が良いんだけど、どうやって維持していこうかっていうところに、その楽しさを感じる人たちが同じように乗ってくれるかというところだと思うんです。そこでやっぱり良いなと思ったら、場所が必要だという、前もお話あったと思うんですけれども、フラットな話し合いの場所みたいな実際の空間という場所でもそうですし､機会という意味でも場所だと思うんですけれども、そういったところが非常に開かれた状態でまちの中にあるということが非常に人々を安心させるような気がするんですよね。シンボル的にでもそうですし、実際の場所としても、まちの中に良い形であると、とても良いことになるのではないかなと思って。“つながり”という目に見えない部分と、“場”という目に見える部分との組み合わせというのが、このプロジェクトチームの報告の中で､とてもすてきなイメージだなというふうに思いました。

○笠尾委員

今のお話を聞いて私も思ったんですけど、つながりは見えない、その日常も面白いんだけど、やっぱり見えない。そういうのをいろいろ一つ一つ見えるようにしていったら面白いと私自身は思っていまして、さきほど申し上げた思い出を絵にするという、見えないものを絵にしていくのもそうです。うちの研究室も留学生が結構いますが、日本に来る前の日本のイメージと、来てからのイメージは変わっているんですね。それは何が違うのかをコメントと絵を一緒に描かせているんですよ。そうすると、向こうにいる時には大体 AKB とかのイメージしか持っていなかったけど、こちらに来てからは、色んな具体的な話が出てきます。例えば「電車に乗ろうと思ったら一緒に乗ろうとした時の相手が、急にどうもすいませんと謝ってきた、そんなこと中国では絶対ありえない」というような話だとか、イメージの変化は絵にした方が伝わりやすいし面白いですよね。そういった面白いものはきっといっぱいあって、特に中野の日常の中の面白さがいっぱいあるから、それをいかに見えるようにして行くか、“見える化”ができたら、たくさん魅力が発見できるのではない

かと思うので、見えない日常の面白さを“見える化”していくシステムみたいなものがあったら面白いかなと思いました。

○宮脇部会長

ありがとうございます。言葉の表現は違いますが、やはり“つながり”というところで、皆さんそれぞれからご提案をいただいているというところで、それを支えるものとして面白さですとか、今の見える化の問題、それからデジタルネットワークの問題等、ご指摘をいただいていると思います。こういうものを少し整理して、総論部分を形成し、それからオープンデータあるいは地域の愛着といったところ、観光客といったところ、女性や高齢者の就労といったようなところについても、だいぶ意見をいただきましたので、整理をしていきたいと思います。

先ほど申し上げましたように、今までいただいた意見をもう一度整理しまして、大変恐縮なのですが、副部会長にご相談をしながら、次の審議会全体会に提出をする部会報告資料の案をまとめて、9 月の中旬くらいまでに、皆様にその資料をお送りするという形で進めさせていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。その間でも、今日ご発言をいただいた点、あるいはそれに付け加えたい点がありましたら事務局にお寄せいただければと思います。いろんな意見をいただきまして、一度まとめないと整理がつかなくなるので、早めに整理したいと思います。整理するにあたって確認をしないといけない部分も出てくるかと思いますので、その際にはよろしくお願い申しあげます。

部会報告資料を作るに当たりまして、何かこれだけは、言っておきたいということございますでしょうか。

○横田委員

資料を作るにあたって、全体会には臨時委員は出ないということになっているので、出ないで楽で良いなっていう気持ちもあると同時に、全体がどうなってるのかわからないさみしさも感じるのですが。これは臨時委員は出ないということになっているという理解ですよね。

○永見基本構想担当課長

そうですね。臨時委員の方は、部会のみにご出席いただくということになっております。申し訳ありません。

○宮脇部会長

全体会はあと 2 回ございます。次回の 9 月 27 日（金曜日）の全体会での状況をご報告さ

せていただく予定ですので、その際にも、こういう点が足りないんじゃないか等のご意見があればお伝えいただきたいと思います。そういった形でお願いできますでしょうか。申し訳ありません。

それでは時間になりましたので、本日の議事はこれで終了したいと思います。本日ご審議いただきました事項・内容を踏まえまして副部会長と私、それから事務局と調整をいたしまして全体会への報告資料を作成し、9月の中旬ごろに皆さんにはメール又は郵送でお届けをしたいというふうに思っております。

最終的な答申につきましては全体会でまとめていくことになりますので、部会としましては、今回が最後ということになります。これまで部会委員の皆様には大変ご審議にご協力いただきまして、ありがとうございました。委員の皆様は、次第のもとに記載がありますように9月27日金曜日、それから10月18日金曜日の19時から中野区役所予定しておりますのでよろしくお願いを申し上げます。臨時委員の方から一言ずついただけるでしょうか。

○笠尾委員

デジタル化は大事なので、これはぜひ実現してもらいたいと思っています。

○横田委員

今回は、答申を作るためなのですけれど、もっと気楽にこういう会があってもいいのではないかなと思います。このような場でいろいろなところから集まったものが意見交換されるということ自体が、区民参加を進める上での一つのツールではないかなと思いますので、もしそういうことが可能ならと全体会でご提案いただくのが良いかなと思いました。ありがとうございました。

○宮脇部会長

どうしてもなにかをまとめるというのは、ロジックを考えなきゃいけないという仕組みになるのですが、もっとフランクにいろんな意見というのを出し合って、何か結論を得るのではないけれども、というのもいいんでしょうね。ありがとうございました。

最後になりますけれども、事務局から何か連絡事項がございましたらお願いします。

○永見基本構想担当課長

今日が最後の部会ということで、貴重なご審議いただきまして誠にありがとうございます。お車でいらっしゃった方は、のちほど処理をさせていただきます。

○宮脇会長

それでは以上をもちまして中野区基本構想審議会・自治共生活力部会第５回を閉会させていただきます。ありがとうございました。

―― 了 ――